

どうなる、大平財政の舵取り能力

— 作家・城山三郎氏との対談 —

蔵相への注文がない

城山 ここへ来る途中、タクシーの運転手さんに、「あなた、もし大蔵大臣に会うとしたら、何か注文することありますか」って聞いたら、しばらく考え込んで何もいわないんです。「やっぱり物価かな」と水を向けても、それでも答えない。しばらくして、「物価も物価だけど、このまま不景気になっても大変ですからね」というわけですね。

昔だったら、景気をよくしろとか、物価を下げるとか、一つだけ簡単にボツと出てくるんですけど、やっぱり今は非常にむずかしい状況にあるということを庶民も肌で感じているようですね。大臣はどうお考えですか。

大平 いったい今の問題は何か、と問われた場合に、その運転手さんが素朴に当惑する姿、それがまさに現在の全世界の姿だと思えます。

われわれは戦後は欠乏状態から物を充足させる、それから欧米先進国の水準を目ざす、ということを目指にやってきたわけですね。ところが、その目標に曲がりなりにも到達してみると、本当の満足とか、幸せとかを手にしつかり握っているとは思えない。そこでは、たと当惑して、従来われわれが追求した道標、立っていた地盤を、もう一度考え直しているというのが現状じゃないでしょうか。なんとというか、これまでと違った時代にわれわれは入り込んできた感じがします。

城山 そういう新しい時代という意味では、たとえば物価ですが、どんどん上がるとはいわれないで、新価格体系への移行なんだという言い方がありますね。でも、新価格体系はいいとして、それから先もまた止めどもなく値上げが続くんじゃないか、というのが庶民の心配だと思っんです。どっかで歯止めはないだろうか、それを期待しているのではないんですか。

大平 物価の安定とは、裏返せば安定した消費ということですよ。私は物価が低位に安定して、諸国民が潤沢な消費ができるような世の中ではないと思う。そうなる、かえって世界は大変だろうと思う。世界はそんなに甘い状態ではないと思います。

つまり、欲しい物を欲しい時に、欲しいだけの分量を、安定した価格で供給するのが経済の役

割であり、そのように誘導するのが政治の役割である。それを十分果たしえない政治は良くないんだという、従来と変わりないような議論が今も展開されている。けれど、問題はそういうところにはないと思う。絶対的に有限な地球上の資源を、われわれの同時代にみんな使ってしまった、あとは野となれ山となれでいいものかどうか、そのことが問われている時代が現代ではないですか。

したがって、こういう時代にいかにしてみんなが共存できるかという条件をさがすのが、追求めべきわれわれの道標であって、新価格体系ができて、それが定着すれば再び安心して物を消費できるといふ、そんな甘い世界じゃない。物価や消費に対する、そして物に対する考え方を変えなきゃならない時代になってきた、という感じがするんです。

城山 言葉を変えれば、政治家の決断とかだけで片づく時代ではないということですね。ですけど、さきほどの運転手さんですが、「じゃ、何も政治に期待しないのか」と聞くと、やっぱり決断というか、英断というか、思い切ったことをやってくれないかという期待があるわけですよ。このまま、ずるずると行くんではなくて……。

大平 その決断の内容は何かということが問題なんです。在来型の決断とはちがって、これからはむしろ非常にネガティブ（消極的）なものになるんじゃないだろうか。こういうことはすまい

とか、こういう情性は改めようとか、こういう無意味な慣行はここらで終止符を打とうとか、そういった決断をするような政治を求めるべきじゃないだろうか。

物価を下げて、資源の豊かな供給を確保して、それでいろいろなプログラムを精力的に実行に移していくという、ポジティブ（積極的）な決断を、いま政治に望むのは間違いだし、また政治がそのような決断をすると、大きな間違いを犯すことになると思いますね。つまり決断の方向が昔とはちがってきていると思っんです。

城山 たえば日中国交回復の瞬間みたいな劇的フィナーレは、財政問題ではありえないのだということですか。ウーン。

大平 何をやるかより、何をやらないかのほうがむずかしいんです。何かをやるということとは、比較的コンセンサスが得られやすい。

ネガティブな決断

城山 よく財政と金融は夫婦みたいなものであって、財政のほうが金遣いが荒ければ、金融のほうで引き締めなくちゃいかんといわれますね。ところが、ここ二、三年、政府は大型財政を組ん

でどんどん金を使っていくのに、金融のほうもどんどんゆるめて、両方でバツと金を、バラまいた時期がありますね。その意味で出すことはやさしく、押えることは非常にむずかしいということとばかりです。それだけになおさら、なぜ金融当局者は職を賭しても金融を押えるようにしなかったのか、そこいらが疑問なんです。これ、今後の日銀総裁人事にもからんできますけど、押さえるためには職を賭すようなタイプの人がほしいですね。

大平 一般にフィスカル・ポリシイというふうなものは、中央銀行を含めて政府の手で需要をマネージできるし、またそうすべき責任が政府にあるんだというケインズ学派の考え方が基調にあります。それが、不景気なときに信用を創造して、生産をおこし、職をつくり、経済に刺戟を与えていくというだけならよかった。けれども、不景気であるうとなかうと、のべつまくなしにフィスカル・ポリシイを手軽に使い過ぎて、はじめがなくなってしまうのが現状ではないでしょうか。

城山 そういう意味では、はじめをつける政治が待望されているかもしれませんね。

大平 だからアメリカのフォード政権のもとでも、フリードマンみたいな非常にコンサバティブ（保守的）な考え方の学者と、ガルブレイスみたいなデモクラット（民主党員）の花形学者とが、ちょうど同じようにこのフィスカル・ポリシイに反省めいたことをいい出してきました。これは、

世界が一つの大きな反省期に入っている兆候だと思えます。

城山 カネさえバラまけば人氣は得やすいから、政治そのものが非常に放漫になってきてたんですよ。これを締めると、非常に不人氣になるし……。

大平 ありがたいという気持ちで乏しいんだな、何をやってもらってもね（笑）。

城山 といつて締めすぎれば不況の心配がでてくるというわけで、二律背反というか、舵取りはなかなかむずかしいではありませんか。

大平 私は決定的にどちらか一つ選択をしなければならぬとは考えていません。つまり、インフレの終息をはかりながら、同時に破局的な不況を避けることを狙わなければならないが、それはできない相談ではないと思います。それというのは、私はこの不況がそれほど底をついて、二ツチもサツチもいなくなっているとは見ていません。また、いまのインフレは非常に悪質で、もう一ぺん狂乱状態を現出して大変なことになるとも考えていません。

欧米各国に比較して、日本を景氣的にも、あるいは物價的にもけつして劣っていないような状態にはしなければならぬ。また、それはできるんじゃないか。それだけの能力は、日本人が持っているんじゃないか。そういう意味で、樂觀もしてないけれども、悲觀もしてません。

自民党政治は天下の悪政か

城山 現実に金融を引き締めている一方では、物価はどんどん上がっているし、住宅問題一つとっても深刻じゃないですか。銀行は住宅ローンは締めていないというけど、そうとう締めていませんね。ただでさえ建築費は高騰しているのに、金は貸してもらえないということで、庶民の住宅建設は絶望的になってきていると思うんです。人によっては、外国だって借家が多いんだし、持ち家なんて贅沢だ、という意見もありますけれど、初めから庭つき一戸建ては無理だと決めつけるのは残酷な気がしますけどね。大平さんは、なんか田園都市国家ということをお考えになっ
ているそうですね……。

大平 幸か不幸か、いま人口の都市から農村へのUターン現象が起こってきました。東京とか、大阪は必ずしも住みよいところじゃない、もう魅力を感じないというわけですね。東京みたいな人口一千万人を超えるとところは、もはや一つのコミュニティとして成り立たないと思うんです。十万とか二十万ぐらいの都市が、一人の市長の目が届きうる、あるいは住民相互の交流が円滑に行なわれる手頃な規模じゃないですか。だから、そういう方向へもっていかなければいけないと
考えているんです。

その観点から見ると、日本の国土はけつして狭くはない。未開発地をまだずいぶん持っているんですから、そういうことが可能になるような状況を、だんだんと時間をかけて作っていかねければいけないと思います。しかし、それは五カ年計画や十カ年計画でできる仕事じゃない。われわれの政策の道標として常に考えておかなければと思っているわけです。

城山 とすると、それは当面の庶民の願望には役立たないわけですね。

大平 ことを立派になし遂げることはなかなかむずかしいし、時間もかかります。何でも、自由民主党政府が世界でも悪政の典型をやっているようなこと、いつてるけれどもね、実はそんなにお粗末じゃないですよ。住宅をみても、これでも他の国より持ち家率は高い。六割ぐらいになっています。

それに毎年少しずつこれを改善して、去年も百五、六十万戸を建てましたし、今年は去年より減ったといつても、百二十万戸の計画になっています。急にふえた去年より今年は少ないけれども、四十六年度前より多いわけですから、そんなにお粗末な住宅政策やっているわけじゃない。やかましくお叱りを受けているところですが、なにもかも一ぺんにいいことをしなくてもいいんじゃないですか。ポツポツやっていけばよい。住宅ローンにしても着実に増えていくようにしていきたい。

城山 しかし、庶民の実感としては、銀行はなかなか貸してくれませんよ。

大平 われわれは金融全体を締めているが、住宅ローンについては、大いに銀行にも協力願っている。また住宅金融公庫にも予算を追加して、住宅金融を進めているわけです。銀行の貸出残高の中で住宅ローンの占めるシェアも、着実に増えてますよ。

去年は住宅ローンが急ピッチで増えちゃったから、それに比べて今年は少し増加のテンポが低くなっているけれども。

庶民もババをひけ

城山 そこで、さきほどのけじめということになりますが、今度の予算の規模をどのように押えるか、それが一つのけじめになると思いますけれどね。戦後の財政の歴史を見ると、ドッジ・ラインという税制が強力なインフレ抑止力になりましたけれど、それだけではなくて、やはり財政規模というものも大きなキメ手になったといえると思うんです。

大平 そうです。すでに人件費その他の当然増の経費だけで二割や三割、財政規模を大きくしているということですよ。

城山 硬直化しているわけですか。

大平 ですね。それを私が最初に申しましたように、ネガティブな対応をして、ここで一つ我慢しようじゃないか、ということになれば、それだけ規模は縮小する。けれども自らは犠牲を払うことはごめんだ。できたらもっとサービスをということでは、規模は小さくせよといったって、やりようがない（笑）。

「おれはジョーカーを抜くのはいやだよ」という仲間と一緒にババ抜きをやっているようなものですから、ゲームにならないんじゃないでしょうか。

だから、ここでよほどみなさんも考えてくださらないと……。ドッジ・ラインのときも、昭和二十四年から二十五年にかけて、わが国の租税の歴史上、最高の重税を国民が甘受してくれた年だったんです。

城山 財政規模をふやすなら、重税を甘受しろというわけですか。

大平 いやインフレと戦う以上、今年もそういう決意でやってくれるなら、道は開けてくるわけですからね。

城山 そうはいわれても、庶民としては、やはりババはごめんこうむりたい。やっぱり、強いものにババはひいてもらいたいですね。

大平 国民に対してこれだけはひとつ辛抱してもらいたい。しかし同時に、政府はこれだけは辛抱する。また、これこれの階層にはこれだけの犠牲を覚悟してもらうから、その代わりみなさんはこれだけのことはご負担いただかないといけないということを、勇気をもってやらなきゃ、なかなか予算は組めませんね。

城山 やっぱり、ある程度、政治家も泥をかぶる姿勢でなければいけないでしょうね。

大平 こうもしてあげます、ああもしてあげます、と痒いところに手の届くようなことを、もしいまの政治家がいったとすればマユツバものじゃないんですか。国民はもはやそんなことは期待していない。むしろ真実をはっきりいつてくれないか、口先のご挨拶は聞き飽きた、という気持ちじゃないですか。

城山 たとえば、政党によっては児童手当を一律に何千円出すとか、何万円出すとかいいますけれども、そういうことをやると経済のメカニズムにどうはね返ってくるか、そこを考えてもらわないと、何でも出すというところで話を片づけられたら、あとで物凄い傷が残ってくることはたしかですね。

大平 そういうことだと思います。国民のほつがもつと真剣に考えているのではないのでしょうか。

城山 そうしますと、国民に対してどういふ負担を要求し、また政府はどいふ面を我慢していかのか。具体的な政策をお聞きしたいのですが。

大平 具体的にいえといわれても、とっさにはむずかしいが、ただ去年に較べて今年は、日本にとっていいことはなく、悪い条件ばかりが出揃っている状況だ。そうだとすれば、去年よりいいことはないと覚悟していただかなければならない。政府のサービスにしても、税金にしても、去年より都合がよいようにはまいりかねる。もっと節度をもってもらいたい。一口にいうとそういうことですね。

茫漢のみの人柄が

城山 うちの子どもなんかもういんですが、庶民から見ると大平さんは普通の政治家とはぜんぜん印象が違うんですね、茫漢としていて、率直にいうと、それで最初は非常に人気があった。でも、おっしゃることの内容が、なかなかわからないでしょう、語り口が非常にゆっくりしているし(笑)。だから、大平さんという人は、本当に茫漢だけじゃないかなという感じを持たれちゃう。

大平 それがほんとじゃないですか。茫漠というか、自分自身がほんとにわからないんですよ、ほんとにむずかしくて。みんながわかるはずがない、しゃべっている本人がよくわかっていないんだから（笑）。

城山 なるほど。

大平 わからないから、どうも言回しが非常にまわりくどくなって、よけいわからなくなっちゃう（笑）。

城山 わからん小説の中に、本当はいい小説があるんですがね。わかる小説というのは、みんなダメなんで（笑）……。でも、そうわからん、わからんでも困るわけで、今日は少し大平さんという人間をわかるようにしようというのも、こっちの狙いなんです。たとえば、大平さんは戦争中「国民酒場」というのを考えられた。「自身、お酒は……」。

大平 好きじゃないんです。

城山 賛沢は敵だということで、料亭なども全部禁止した時代に、酒は国民にとって重要な飲料だから、とにかく飲むチャンスはつくってやるべきだということで、作られたということですが、その時のいきさつはどんなふうだったんでしょうか。

大平 東条内閣の時でした。私は大蔵省でお酒の行政をやっていますね。戦時中のこととてきわめてわずかの酒とかビールでしたが、それを軍需用、業務用、産業用、一般用とに配っていたわけです。ところが享楽停止ということになって、お料理屋さんへ割り当てられていた業務用の酒が浮いちゃったわけです。

城山 それを放っておけば、軍の方へいっちゃいますね。

大平 あるいは軍需産業にまわるところだけでも、やっぱり一般の方がたも、勤労のあと、ピヤホールでちょっと一杯飲んで疲れをいやすとか、ウサ晴らしするとか、そういう風穴があるんじゃないかなるかと思えますね。で、業務用で浮いた酒を集めて、都内で三百軒ばかりの「国民酒場」をつくり、酒とビールを配給して売ってもらったことがありますかね。

すると、おかみさんが土瓶をもってビールを買いに来るんですよ。それを持ち帰って、亭主が帰ってくるのを待つという寸法です。清酒ならば、うちで燗して飲めますけれども、ビールでしょう、どんな味がしたことやら（笑）。

城山 でも、それは非常にいいアイデアだったと思います。押える、締めつけるだけじゃなくて、本当に庶民の求めているものに吐け口を与えるということ。そういう意味で、あれは非常に親しめる庶民的な発想ですね。

大平 「国民」なんていう表現が、やはり戦時中の感じですよ。いまでいったら、「市民」かな。城山 そういう意味じゃ、こんど日本経済という大きな「国民酒場」のオヤジさんみたいになつたわけですが（笑）。いま、日本の経済は公用、社用だけで支えられているみたいなどころがありませんからね。そういったものを少し押えるようにして、本当にお酒の好きな人が楽しんで飲むみたいな形になつたほうがいいですね。

大平 花見酒じゃなくてね。

池田元首相は愚直

城山 池田内閣時代の「低姿勢」とか、「寛容と忍耐」とかいった言葉も、じつは大平さんの演出だつたと聞いて、あの茫漠としている大平さんとそのキャッチフレーズがうまくつながらなかつたんですけどね。しかし、「国民酒場」なんかと考え合わせると、わりあいそういった演出みたいなこと、いろいろなさっているんじゃないんですか。

大平 「低姿勢」は私のいったことじゃなくて、新聞社の用語です。私にいわせれば政治家には正しい姿勢しかないわけで、高い姿勢、低い姿勢といったものはないはずですよ。

それから、「寛容」とか、「忍耐」とかは日常生活においても、政治の世界においてもあたりまえのことじゃありませんか。城山さんまでがそれを問題にされるというのが、ちょっとぼくにはおかしいんだ（笑）。

城山 でも、庶民感情としては、政治家が自ら「寛容と忍耐」なんていったことはあまりなかったことですからね。

大平 当時、安保騒動がありまして、国会周辺を何十万という人間がワアワア取り巻いて緊張をよんだわけですね。

城山 ぼくもその一人です（笑）。

大平 これを力で押えるなんて出来ることじゃない。お互い、理解し合わないと仕方がないじゃないかと思っただんです。

たとえば、私は野党に対しても池田さんに「友党」という言葉を使ってもらった。みんな同じく米を食い、日本の風土で育って、同じ教育を受けているのだから、与党だ、野党だといっているけど、意外に近いんですよ。ところが、表向きはまるつきり百八十度方向がちがっているように見える。これはおかしいんですよ。狭い日本でつまらんことではないか。だから、野党に対しても、仕方がないとあきらめずに、忍耐強く話をするのがあたりまえのことじゃないか、と考えたにすぎない。

それから「寛容」ですけど、お互いに乾ききってどうにもならないという気持ち、その気持ちのやり場がないという状態というのがありますね。たとえば、このごろの物価高にしても、お米が高い、高いとおっしゃる方がたに、「じゃ、いったい十キロでいくらしているか、あなたはご存知ですか」というと、「知らん」というんだ。その方がたを連れてきた人に「あなたは知っているか」と聞くと、その人も「知らん」という。そういう人たちが、高い、高い、値上げをやめろといつて来るわけでしょう。しかし、その人たちにもどうにもならないという気持ちがあることは事実ですよ。だから、なぜそういう気持ちになったのかということアイデンティファイというか、共感することが「寛容」だと思っんですよ。

それを心がけていくよりほかに分別がないのではないですか。おまえはつまらん奴だと押えてみても、ますます反抗するだけです。そうじゃなくて、お互い、一緒に考えようじゃないか、ということですよ。友情の世界でも、商売の世界でも、政治の世界でも同じことなんです。アイデンティティを無限に積み重ねていくことが大切なんじゃないですか。それを一口にいえば、「寛容」というのかもしれない。

で、そういうことをいつている間に、いつの間にか、さしもの安保騒動がケローツとおさまっちゃいましたね(笑)。

城山 あれは『寛容と忍耐』という言葉がかなりきいたと思いますね。あの騒動は安保問題だけじゃなくて、岸内閣が強行採決をやったことは民主主義のルール違反だという怒りがかなりのエネルギーになっていましたから。そこヘルール違反はやらない、力による政治はやらないんだということ、かなりの鎮静効果をあげたのだと思いますね。

大平 イメージづくりというほど、気のきいたものじゃなかったけど……。

城山 やはり茫漠ですか（笑）。大平さんは「池田さんがいなくなったら、今日の私はなかったろう」と、おっしゃってるようですが、私、一回だけ池田さんに会ったことがあります。非常に書生っぽい方ですね。私が、池田さんは数字に強いといってるけど、じつはあの人の数字は自分勝手な使い方している、本当は数字に弱いんじゃないか、という短い文章を書いたんです。それにクレームをつけて、「うちへきてくれ、説明する」といわれて行ったんですよ。それで鉛筆持って計算したりなんかしながら、一生懸命、説明する。一国の総理という感じじゃなくて、ゼミナールで学生と先生がやり合っているみたいでしたね。

大平 池田さんのいいところは、あなたのおっしゃるように、愚直に問題の解明にあたるるところですね。

城山 愚直ということは大事ですよ。

大平 彼は課長であろうと、次官であろうと、総理であろうと、変わらなかった。一貫して鉛筆をなめなめ計算したんですよ。それで、郵便貯金とか、外為会計とか、国庫金の毎日の動きをじつと見ていた。それと株価の動きをね。しかし、あの人、本を読まないんですよ（笑）。自分で考えるんだな、いろいろなデータを持つてね。だから、スマートじゃなかった。理論的にもちよつと弱いところがあった。

城山 デイス・インテリですか（笑）。

大平 愚直な人で、それほど偉大な人ではなかったと思います。ぼくらも、もつと気宇壮大であつてほしいと思つたことが、ずいぶんあります。だけど終始変わらず、愚直さで押し通したという点は、ある意味で偉い人であつたのかもしれませんが。

城山 池田さんも、大平さんも、大蔵官僚の中では嫡流じゃなくて、大蔵官僚としてはちよつと肌合いが違いますね。

大平 ええ。

田圃がないから月給取りに

城山 前に通産大臣もなさっていますが、大蔵と通産と、官僚気質の違いみたいなものを感じましたですか。

大平 通産省の場合は、ものごとをプロモートしたり、エンカレッジ（鼓舞）したりする。大蔵省のほうは、そいつをチェックするという性格です。どちらかというとネガティブな仕事を潔しとしない連中が、あるいは通産省に行ったかもしれない。

城山 たとえば通産は佐橋滋さん（元通産次官・現余暇開発センター理事長）みたいな型破りな人がいますね。大蔵にはあまりいないんじゃないですか。

大平 そうですね。大蔵省にはそれでも長沼弘毅さん（元大蔵次官）や三島由紀夫さんみたいな方もおられた。案外、多彩な才能を持っている人がおりますよ。

城山 高商（旧制）にお入りになるときは、月給取りになりたいくらいの気持ちで入られたんですか。

大平 うちに耕す田圃はないしね。月給取りになるよりほかに道がなかった（笑）。

城山 どこか就職なさったんですか。

大平 しなかつたんです。当時、ある人と薬品を作る仕事をもくろんで、その利益でキリスト教の伝道をやるうじやないかということになり、当時旧制の神戸高商の今井嘉久君などとやり出したんだけど、結局うまくいかなかった。

城山 儲けるほうがね（笑）。

大平 それでお互いにやめて、今井君も私ももう一ぺん、学校（東京商大・現一橋大学）をやり直したんです。

城山 大蔵省に入られたのは、どうしてですか。

大平 これが不思議でしてね。大学の三年のときに高文の試験（現在の国家公務員上級試験）を受けたら、通っちゃったんですよ。そのころは、卒業したら法律なんか勉強できないということ、学生のうちにいちおうやっておこうと、二年ころから考えて、高文の試験を受けたもんなんです。それが通っちゃったものだから、当時大蔵次官の津島寿一さんのところへ相談に行つたんです。郷里の先輩ですから、「私、じつは来年卒業で、高文に通つたんですけれど、何も役所に入らなきゃいかんとは思っていないんですが、どうしたらいいでしょう」とね。すると津島先生が、「君、大蔵省にこい」といふんですよ。「こいといわれますが、採ってくれるでしょうか」「今日、ここで採用してやる。間違いないから、ほかを受けないでよろしい」（笑）といわれたので

す。あれはちょうどいまごろの季節でしたね。卒業の前年の十月にはもう内定してくれたんです。

ところが年が明けると二・二六事件がおきて、大蔵大臣の高橋是清さんが殺された。津島さんもそれに殉じて辞められたわけです。ぼくを採用してくれた本人が辞められるというんで、あわてて大蔵省へ行つて、「あなた今度お辞めになるそうですが、私のほうは大丈夫でしょうね」「何を馬鹿なことをいつてるんだ。公人としての約束だ。ちゃんと卒業できるように勉強しておけ」といわれました（笑）。

城山　じゃ何となく入っちゃった？

大平　津島さんがこいといわれたから入ったわけです。

城山　でも、商會社とか、銀行とかへ入つて、経済人として金儲けする方の能力はないと自分で見限つておられたんじゃないんですか。

大平　内心は住友に魅力を感じていたんです。子どもころから四阪島（住友の製錬所がある）の煙を見ながら学校へ通っていたし、私どものところから別子銅山にたくさん働きに行っていたしね。住友というのが非常に身近に感じられていたんです。別子は住友財閥の発祥の地ですから。それに私、川田順という歌詠みが好きでした。あの人の著書は、みんな涉獵して読んだぐらいです。あの人が住友の理事でしたしね。

オバさんにもてた

城山 大蔵省を辞められたときは、今度は自分の決断で辞められたんでしょう。

大平 ちょうど池田さんの秘書官を三年半やりましてね。代議士になったらどうだという話になって、立候補するために背水の陣をしいたわけです。

城山 でも、あの時、占領軍の手による試験制度ができて、それを受けるのはいやだったから辞めたんだとか。

大平 その時はもう政治を志すつもりになっていたし、いまさら落っこって恥をかいてもしょうがないと思って、受けずにいたんですけどね。ところが、前東証理事長の森永貞一郎氏（元大蔵次官）、彼が官房長で、やかましく受けておけといわれるものだから、仕方なく最後に受けたんです。非常に危ないところで、やっとクリアできたんですよ。

城山 代議士に立候補して、もし落ちたらどうするかということとは考えませんでしたか。

大平 落ちていれば、いまどうなっていたかな（笑）。でも最初に立候補したときから、選挙区のオバさん連には案外人気があった。演説会場をまわるでしょう。五十がらみの年増連が次の会

場にもソロソロきてくれるんです。私の話はぜんぜん面白くないのによくきてくれる。不思議に思つて、演説が終わつてから聞いてみたんです。そうしたら、「あんたは男前じゃないが、笑顔が可愛いからフダ（票のこと）入れてあげる」といわれるのです。四十二歳の時でしたがね。

城山 そういふ点は、わりあい無鉄砲というか。楽観主義というか……。

大平 私はもともと楽道家でした。落ちた時のこと考えると、立候補なんかできませんよ。

城山 本屋へ行くのが好きだそうですが、いまでも行きますか。

大平 とまどきですね。古本屋じゃないですよ、新本屋で。あなたの『落日燃ゆ』をはじめ、いろいろその時どき出る本がありますよ。いま、どついつ本が読まれているか、洛陽の紙価を高めているかといふことで、世の中がわかるような気がするんです。そして、五、六冊買ってきまして、全部は読めませんが、気の向いたときに気の向いたところを読むことにしているんです。一気に読んでしまう本もあります。あなたの本なんか、そうでしたよ。

城山 『落日燃ゆ』は書いた本人としても、あれほど売れるとは思つてもいなかったのですけれどね。つまり、みずから弁解せず、みずから事を計らないという政治家像、ああいう生き方が、いまの世の中で非常に求められているといふことなのではないでしょうか。

大平 みずから弁解しない、みずから計らないばかりか、みずからを痛めていますね、広田弘毅

さん（元首相・『落日燃ゆ』の主人公）は、とても真似のできないことです。

城山 あの人也非常にわかりにくい人だったんですね。自分のことは自分ではいわないし、茫漠として、つかみようがない。

大平（手を振って）本当に偉い人です。それに引きかえ、こっちは……（笑）。

城山 その点、大平さんと田中角栄さんとは、人間的にもまるで正反対の感じを受けるわけですが、お二人の盟友関係というのはこれからもうまく続きますでしょうかね。

大平 彼はどっちかというと、明るい楽天的な積極政策論者のように見られやすい人柄ですわね。彼が緊縮とか、節約とかを話したって、あんまりびったりしない（笑）。イメージが合わないんだね。やっぱり豊臣秀吉的などころがありますから、性格に。

私の場合は秀吉的じゃない。どちらかというと徳川……（いいかえて）ま、少しパツとしないほうで、性格が違いますけれどね。しかし、こういう状況のもとにおける経済政策というものは、誰がやるかと決まっているわけで、その点で考えの違いはないですよ。